

第26回 日本検査血液学会学術集会

2025

7/26 土 12:05~12:55

第6会場 (国立京都国際会館 1F Room H)

Zn

一般集団・患者集団の 血清亜鉛濃度の実際と 低亜鉛血症者の頻度やその臨床像

座長

稲葉 亨 先生

京都府立医科大学 感染制御・検査医学 病院教授

演者

横川 博英 先生

順天堂大学医学部

地域総合診療研究講座・総合診療科学講座 特任教授

本セミナーは、事前申込制です。

※整理券はセミナー開始5分後に無効となりますので、ご注意ください。

第26回日本検査血液学会学術集会

共催

株式会社 シノテスト

一般集団・患者集団の血清亜鉛濃度の実際と 低亜鉛血症者の頻度やその臨床像

順天堂大学 横川 博英 先生

亜鉛欠乏は世界的な公衆衛生上の大きな課題であり、世界中で 20 億人以上（世界人口の約 3 分の 1）に及ぶと言われている。特に乳児、妊婦、高齢者で亜鉛欠乏の頻度が高いことがすでに報告されている。亜鉛は 300 種以上の酵素、サイトカイン、ホルモンなどに関与しており、脳神経系、免疫系、内分泌系、消化器系、循環器系、栄養代謝系など様々な領域の細胞内代謝や細胞応答に関与するそれぞれの活性化機構やシグナル伝達機構を調節することが知られている。亜鉛欠乏により免疫機能の低下、味覚・嗅覚障害、肺炎、発育遅延、視力障害、皮膚障害、リンパ球の機能低下、食欲不振、下痢などのリスクが増加する。近年、亜鉛欠乏が肝疾患、炎症性腸疾患、慢性腎臓病および COVID-19 感染者の疾患予後に悪影響を与えることが報告されており、多くの疾患で患者の亜鉛の欠乏状態を評価する必要性が注目されている。亜鉛欠乏を疑うべき疾患・臨床症状、背景因子は多岐にわたるが、それらの因子と血清亜鉛濃度の関係を網羅的に評価した大規模研究の報告はまだ限られている。私どもは、一般集団に近似すると考えられる人間ドック受診者を対象に疫学調査を行い、潜在性亜鉛欠乏 ($60 \sim 80 \mu\text{g/dL}$) が約 40% 前後存在することを報告した。さらに、患者集団として日本全国の急性期病院を受診した患者のレセプトデータに基づいた、大規模な横断研究を行い、亜鉛欠乏症 ($60 \mu\text{g/dL}$ 未満) が高頻度に存在し、血清亜鉛濃度と関連する因子（背景因子、併存疾患、処方薬、臨床検査値等）について詳細な分析を行った。また、COVID-19 患者を対象に亜鉛の欠乏状況を評価した検討では、COVID-19 の重症度と亜鉛欠乏症の頻度が相関することを明らかにした。当セミナーでは、私どもの自験例を交えて亜鉛の役割を再確認し、臨床上の課題と注意点などについて話題提供したい。